

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第31号 1999年4月1日



「白髪分校卒業の日」

田辺 寿男

昭和四六年春、芸西小学校白髪分校最後の卒業生二人が送られる日があった。写真左の小さい子はまだ小学生になっておらず、兄に付いて通学するうち、岡島先生の厚意で、読み書きを教わっていた子である。この春一年生になる。隣に並んだ犬君は、この写真の一枚先のネガによると、誇らしげに三人の先頭を歩いていたのである。私の「そこで記念写真を撮らして」と頼んだ言葉に素早く反応して整列したのである。ここでは猫も同じで、むしろ猫の方から人に遊びを求めてくる。若しかすると鳥も同じではなからうかと錯覚する。

山頂には天と空間と土がある。人はその空間に植物を植える。山に暮らすと、いつも宇宙空間との語らいがある。山の宗教はこの辺からの発想ではなからうかと、ふと思う。

同分校は明治二九年開校、この年廃校となる。昭和三五年の記録では二十七名の生徒がいた。過疎が急速に進行した。その根源を正せば、何が出てくることであろう。

(高知市文化財保護審議会委員)



『田辺寿男の民俗写真』としお

『ぼくの村は山をおりた』に寄せて

〔会期 平成11年4月23日(金)～平成11年6月27日(日)〕

中村 淳子

《失われた山里》

土佐の民俗を写真にとり続けてきた田辺寿男氏は、昭和四三年から断続的に四年ほどの間、芸西村の白髪・板測・宇留志などの集落で離村の様子を撮影している。

今回の企画展は、それら一連の写真を展示するものである。企画展の題名にある「ぼく」とは、当時、白髪に住んでいた小松幸正くんたちのことだ。田辺氏の写真の中に幼い幸正くんたちがたくさん登場してくるのである。失われた山里の空き地や水路、校庭で幸正くんたちが遊んでいる。

また、「ぼく」とは、山里から平野部へ集団移転した人びとのことであるが、山里を愛する田辺氏のことでもあり、高度経済成長を経て多くの山里を失ってきた私たちのことでもある。

《過疎対策としての集団移転》

白髪は、平野部の安芸市赤野から二里半ほど入った山の中の村であった。

人びとは、田畑を耕し炭を焼き、日雇に出たり木を伐り出して暮らしていた。山頂台地という地形上、水に苦勞した白髪には、昭和三〇年代になってようやく用水路や簡易水道が設置されたものの、早魃が続くとその水も涸れたという。豪雨等で平野に至る道が不通になることもあった。村といっても自給自足の閉じられた空間ではなく、道が潰れると忽ち困ったことになった。

また、現金収入源であった木炭の需要が、ガス普及などの燃料革命によって減少したこともあり、個々の転出が目立つようになった。過疎になればなるほど、移転に加速がつく。芸西村合併当時三〇戸あった白髪は、昭和四四年には一七戸になっていた。

芸西村では、白髪をはじめ宇留志、板測の三集落の転出が特に多かった。このため地元住民の意向を受けた形で、昭和四四～四八年に行政指導で同三集落を対象として、過疎地域集落移転事業が実施されたのである。

《写真による村消失の記録》

写真には記録性がつきまとうが、「誰にでも撮れる記録写真は撮りたくない」と語る田辺氏の離村の記録は、統計的に処理されて終わる記録とは白髪と質が異なる。

田辺氏は、新しい土地に再建するために解体された家や、先祖の遺骨を掘り起こすところ、神社の御神体を山から下ろしてゆくところなどを丹念に撮影している。

白髪や宇留志などの人びとは集団移転を選択したが、それは、たとえ集落名は消えても同じ村人が共に暮らす新しい村をつくりたいという希望でもあったのだろう。そして、新しい村に必要なのは人ばかりではなかった。そこには、先祖も連れてゆき、氏神も祀らなければならなかったのである。村消失の貴重な記録は、同時に人びとにとって村とは何であったのかを物語るものであった。

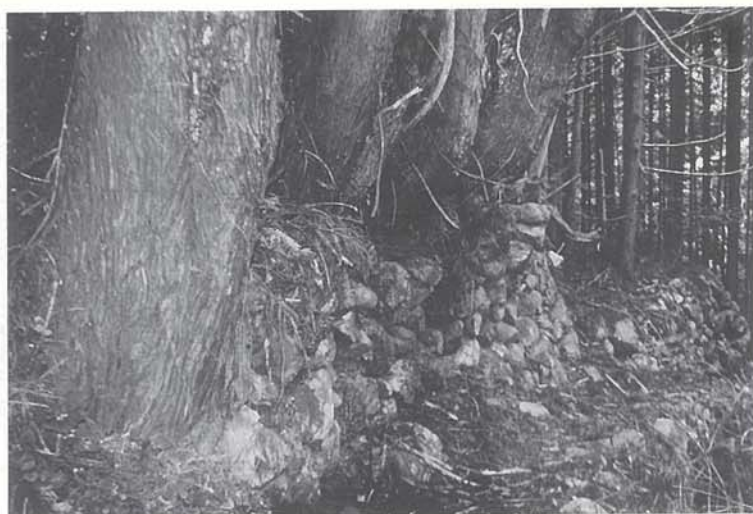


聞き取り調査をする田辺寿男氏(右) 芸西村久重 平成10年

《山を下りるといふこと》

三〇年近い歳月を経て再び離村の調査に取り組む田辺氏に同行した。その過程で、廃村となった白髪や板測を見し、石垣に杉が林立する奇異な光景に目を奪われた。それは田辺氏の写真の中にあつた苗木——屋敷地や田畑に植えられた杉苗が大きくなったものであった。

木漏れ日の道を子どもたちが駆けぬけ、じいさんが山仕事から帰ってくる——かつてはそんな日々の営みがあつた村である。それが今では廃墟となり、草木に飲み込まれてゆきつつあつた。



田畑や屋敷地の植林 田辺寿男氏撮影 芸西村板瀬 平成10年

「親父は残れ、俺は出る」と、先に息子が平地に下りて生活基盤を整えてから父を迎えた話には、先に山を下りた人たちの気概を強く感じた。また、平野の人が都会に出るために売りに出した土地を買って、山の人が平野に住みついた話などには、高度経済成長期という時代の有り様が、いやが応にもあらわれていた。

山に残った人びとは、転出する人の田畑を買ったものの、結局その田畑に杉苗を植えて出て行くしかなく、そうして育った杉も高値では売れず、貧乏くじを引いたという意識もあった。しかし、山の暮らしを良しとして、あえて、踏みとどまった人もいた。

また、離村した人びとを移転先に訪ねて話を聞いた。かつての山の暮らしや民俗行事のことなど、そして、何故山を下りなければならなかったのか——一言では表せないことであろうとは知りつつも、私たちはそれを問わずにはいられなかった。

多くの方が、子どもの教育や医療に困ったと答えた。子どもが病気になる、山から町の病院まで毎日おぶって通ったことや中学生になったら町に下宿せざるをえなかったことなど、具体的な話が次々に出てきた。

芸西村久重くゑに、そんな一人暮らしの女性を訪ねた。「体が動けるうちは馴染なじんだ山に居りたい。けれど、隣が居らんと、一人では居れませんろう」と、その方は語った。その集落には、二世帯が寄り添うように暮らしている。

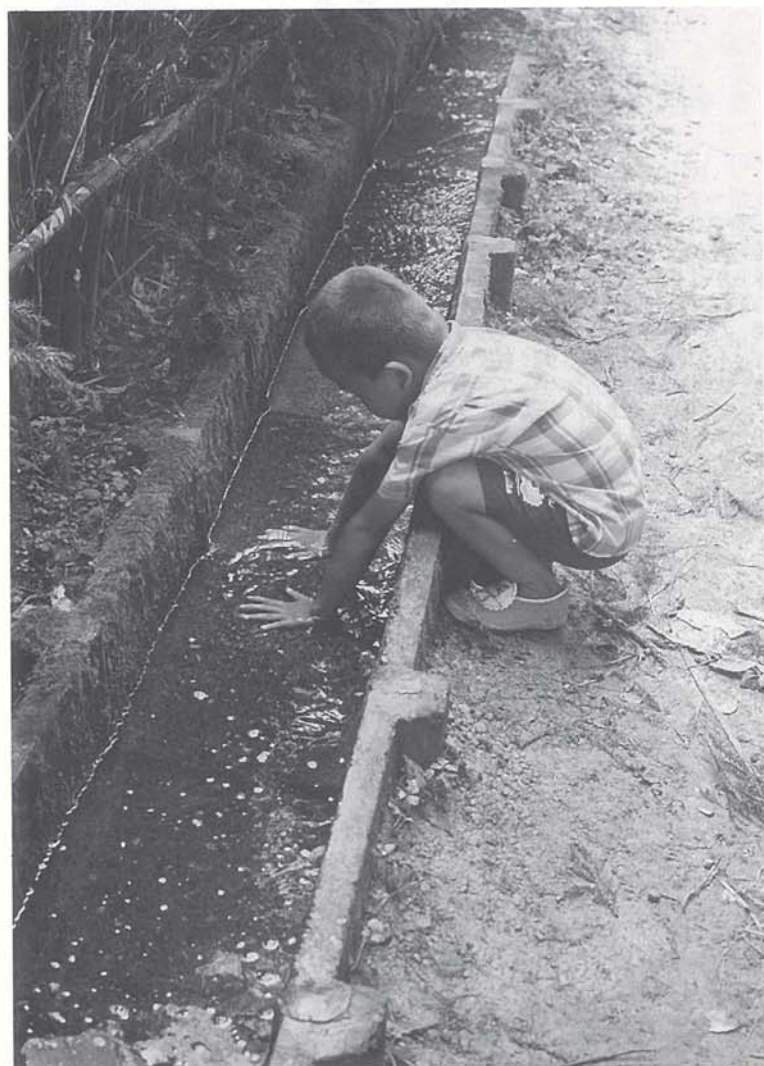
《光と影の中から》

あえてモノクロにこだわる田辺氏である。モノクロ写真は色の情報を取り去られた世界であり、光と影が際立つ。その光と影から被写体の命そのものが立ち上がり、見る人に迫ってくる。

また、田辺氏は「人の心の奥底を見つめたい」という思いで写真を撮っているという。田辺氏が見つめた山里に後にした人びとの心——その欲よぐびと悲しみがあふれた写真群は、私たちの心をゆさぶらずにはおかない。

消えた村は白髪だけではない。平成八年度版『高知県の集落』によると、昭和三五年に高知県には二六三〇の集落があったが、その後、実に三七集落が消失しているのである。

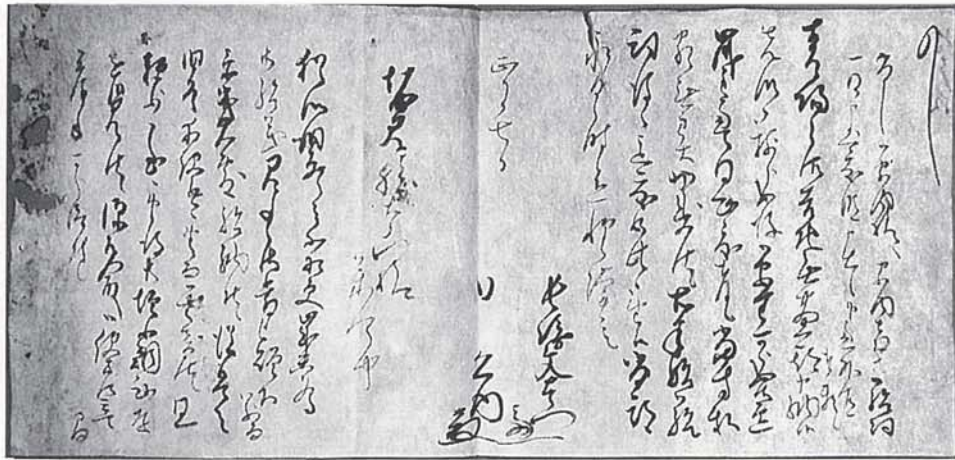
私たちが得たものは多いが、失ったものも、また多い。近代化とは何であったのか、幸福とは——。百万の言葉より一枚の写真が雄弁に何かを語ることがある。一人でも多くの方に田辺寿男氏の写真をご覧いただきたいと切に願うものである。



水路で遊ぶ 田辺寿男氏撮影 芸西村白髪 昭和45年

藩政期の年賀状例

岩原 信守



(解説文)
のし

尚^①御家内様へ家内者共御祝詞一同
申上度段申出候乍慮外宜奉頼候

青陽之御吉地無盡期申納候

先以御揃被成後御安坐可被成御迎歳重
畳目出度奉存候當方私家無異加寿仕候
右年始御祝詞得御意度如此御坐候尚期
永日之時候恐惶謹言

正月七日 同 久 内 花押
堀見勝右衛門様

猶以旧冬^②不相更歳末為御祝義見事
之御肴被贈下別^③忝幾久敷祝納仕候
従是^④旧冬幸便無御坐候^⑤御無音仕
候且輕少之至御坐候得共塩小鯛式尾
進覽仕候源左衛門殿御便差立候間御
落手可被仰付候

(読み下し文)

のし

尚々御家内様へ、家内の者共御祝詞
一同に申し上げ度段、申し出で候、
慮外乍ら宜しく頼み奉り候

青陽の御吉地、尽くる期無く申し納め
候、先ず以て御揃い成され後御安坐御

迎歳成さるべく、重畳目出度く存じ奉
り候、当方私家無異加寿仕り候、右年
始御祝詞御意を得度く、此の如く御坐
候、尚永日の時を期し候、恐惶謹言

正月七日 同 久 内 花押
堀見勝右衛門様

猶以て旧冬は相更らず歳末御祝儀とし
て、見事の御肴贈り下され別して忝く
幾久敷く祝い納め仕り候、是よりは旧
冬幸便御坐無く候て御無音仕り候、且
つ輕少の至りに御坐候得共、塩小鯛式
尾進覽仕り候、源左衛門殿御便に差立
候間御落手仰せ付けらるべく候
注① 尚々以下初めの部分は追伸とし
て書かれたものである。

- ② 陽春の御吉地 初春を迎えられ
た目出たい御地(相手の住む地)。
- ③ 安坐 安らかに。
- ④ 重畳 この上もなく。
- ⑤ 無異 無事。
- ⑥ 加寿 年令を加え。
- ⑦ 御意を得度く 当方の気持ちをお
分かり頂きたいと。
- ⑧ 永日の時を期し候 日が永くなつ
たら又お便り致します。この表現
は実際の永続を願って結びのこと
ばとしたもので、当時の年賀状に
多く使用されている。
- ⑨ 参る人々 御一同様へ。

⑩ 是よりは こちらからは。
⑪ 仰せ付けらるべく候 (使用人
等に) お申し付け下さい。この表
現は、相手に直接手渡すこととは
ばかって、下の者の手を通して相
手に渡すという、相手に対する敬
意の表現である。手紙の脇付けに
「侍史」というのがあがるが、侍史
は相手に仕える書き役の手を通し
て差し上げるという意味であり、
これと共通した考え方である。

(解説)

本書状の宛名人堀見勝右衛門は、明
治・大正時代に地方政治家として活躍
した佐川町の住人堀見熙助氏の曾祖父
である。勝右衛門の生没年は不詳であ
るが、藩政後期文化・文政ごろの人と
想像される。堀見氏は佐川の豪農であ
り、また山内家家老深尾氏の家臣であ
つた。差出人の長崎氏については不明で
ある。ところで一般的には歳暮は目下
から目上へ、年玉は目上から目下へ贈
られた。本書状によると歳末に長崎氏
から堀見氏へ肴が贈られ、年始に堀見
氏から長崎氏へ塩小鯛が贈られている。
これを前記の歳暮・年玉の一般的風習
に当てはめると、堀見氏が目上で長崎
氏が目下であったかと思われる。なお
現在の年賀特別郵便制度ができたのは
明治三二(一八九九)年、丁度百年前
である。

竹村家資料紹介

絵葉書

高松 恵

映し出されている事物について彼ら独自の解説が横に記されている絵葉書も幾つかある。この解説から絵葉書の発行年代が判るものもあるが、その他の絵葉書は無切手、発行年無記載のため明治から昭和初期までのものであるという大まかな時代しか判らない。

江戸中期から昭和初期の間、高知城下町の菜園場橋のたもとに「木屋」と呼ばれる富商が店を構えていた。ここに紹介する絵葉書は、その「木屋」の当主四代目竹村與左右正智（一八三四～一九〇〇）・五代目與右衛門正武（一八六一～一九三七）・六代目茂雄正崇（一八九一～一九五五）達が三代にわた

り蒐集し続けたものである。彼らは稼業である金物商に加え、各々政治面や文化面にも幅広く携わった人々である。彼らが蒐集した絵葉書は、当館に寄贈・寄託されているものだけで官製・私製合わせて三一八〇点に及ぶ（袋・解説書も含む）。全てが紙製で、大半が規定サイズ（短辺九～十・七cm / 長辺十四～十五・四cm / 重さ二～六g

）（官製・私製共）の絵葉書であるが、規格外サイズのものも数十点ある。そして発行元は、不明のものを除くと半数が東京である。これらの絵葉書の大半は、種類別にポストカードアルバムに整理されており、さらには、そこに

一般的に日本における絵葉書は、明治三三年（一九〇〇）に私製葉書が認可されたのを契機とし、流通し始めたとされる。そして、その頃の新聞や写真等の普及を背景に、手頃に時事を見ることのできる媒体として一般に広まり、コレクションの対象ともなった。「木屋」の当主達が蒐集した絵葉書も、絵画的な価値を有するものより時代を反映する時事的な事件や人物を写した絵葉書が多い。例えば、明治天皇御大葬 / 國勢調査記念 / 日獨戦争風景 / 東京神田大火の惨状 / 大日本軍用飛行機 / 新吉原花魁道中の様子 / 早大日米野球 / 相撲力士 / 他民族（台湾・エジプト・マサイ族等）の人物・風習 / 西洋人俳優生首等他にも沢山ある。

今回は、その中でも最も古い時期の風俗写真を素材とした絵葉書を紹介しよう。

サイズ 短辺九・三cm 長辺十四・三cm 重さ一g ネガ番号 一〇九八

発行元 不祥 発行年 明治 / 大正 白黒 外国人観光客対応私製絵葉書

右の絵葉書は、規格サイズで、裏に



安政五年十二月ノ内 七月七夕

The custom ancient time in Japan
(The five year of Ansei)
The festival in July
(in the seventh of July)

写場である事以外は今の段階では不明である。しかし、演出が施されたこの絵葉書の写真からは、安政五年の七夕を迎えようと準備をする家人の様子をみることが出来る。さらに、七夕の祀り方、短冊の作り方や飾り方、男性や女性の髪形・着物など幕末の風俗を細部まで窺うことができる。

ところで、同年の土佐における七夕の様子を「真覚寺日記」（井上静照筆）の中にも、「安政五年七月六日（中略）今夜雨なきゆへ家々二立る七夕の短冊ぬれす / 七月七日今夜星月明也」と記されている。土佐の家々にもこの絵葉書と似たような風景が見られたと考えられる。

この絵葉書の撮影者と目される初代鈴木真一は、石黒敬章氏（「続幕末・明治のおもしろ写真」(株)平凡社一九九八年）によると、一枚の写真の中に二つのシーンを表現することを試みた写真師であると、紹介されている。とすると、この絵葉書の写真も、七夕を作る人（屋内）と飾る人（屋外）の二つのシーンを重ねて表現しようとしたものなのかもしれない。

さて、この絵葉書を含め前にあげた絵葉書全てが、與左右・與右衛門・茂雄達が生きた時代を如実に伝えている。今日においては、ただ懐かしい写真というだけでなく、過去を知る上で非常に貴重な研究資料の一つになっているのである。

レファレンスルームから
その1
べくはい

「○○の由来は？」

「○○って何ですか？」

「○○（歴史上の人物）の愛人は？」

いろいろな質問が、手紙や電話で当館に寄せられます。こういうレファレンス（参考業務）、実は結構多いんです。

数件のレファレンスが一日に集中することもあれば、「あちこち調査に行つたときに、ついでに一緒に聞いといて」となどと、長丁場の課題を与えられることもあります。

そんな中から、「ミイラ取りがミイラ」状態で学芸員が面白がつて調べたものや、ご質問の多いものを掲載してゆきます。

今回は可杯べくはいで、今年秋の企画展「道具が語る食の文化」の準備に余念が無い学芸員がご紹介します。

トウルルル……。今日も昼下がりにレファレンスの電話が鳴っています。

「べくはい」は、「べくさかずき」とも言います。漢字では「可杯」、または「可盃」と書きます。

可（べく）の字は、日用文、手紙文などで「可行候」の例のように、必ず上にあつて下には置かないところから、酒を強いるための、底に小さな穴のある杯のことを可杯と呼びます。その穴を指でふさいで酒を受け、飲み干すまでは下におけません。

また、置くと倒れるように底をとがらせた杯のことも可杯といえます。鼻を大きくつきだした天狗の杯、ひよつとこ面の形などもあります。「可飲み（べくのみ）」という言い方もあり、注がれたら下へ置かずすぐに飲みます。可杯は国語辞典にも載っているぐらいで、土佐に限らず全国で用いられたものようです。

土佐の酒宴ではお流れ頂戴ちょうたい方式ではなく、自らが目上、目下にかかわらず相手に杯を差し出し、受けた者は返杯をするのが儀礼だから、ひよつとしたらこういう風習が可杯を定着させたのかもしれない。

現在でも土産屋の片隅で見かけるユーモラスな形の可杯。宴席に興を添える酒豪たちの遊び心が表現された杯といえるでしょう。

（曾我）

〈歴史雑話〉

学芸員の昔話

お山で遊んだ子どもたち

ある小さな町の子どもの達の秋のしがない一日の出来事である。

学校のない日のお昼前、ガキ大将の家の庭に子ども達は約束したでもないのに集まりだした。今日は何をして遊ぶのか決めるのである。秋の涼しい風が子ども達の頬をなでていく。誰からとなく久しぶりに「遊山にいかんかや」という案がでた。すかさず最年長のガキ大将がその案に決定する。すると子ども達は山に持っていくものを決めるとすぐさま走って家に帰る。自分で遊山にいく弁当を作るのである。家に帰り、母親に適当なおかずはないかと聞くと勝手にご飯を入れ弁当に詰め込む。「どこへ行くぞね」母親は聞く。「遊山へいく。裏の山」。「誰と!」母親は聞く。「・・ちゃんらとよ」。弁当を詰めた子ども達は、また急いで集まる。男の子もいれば女の子もいる。「さあ行くぞ」。「どこから登らあよ」。「今日はこつちじゃ」。「谷川を登るがかよ」。「やかましい早うこい」だれからとなく葉っぱを利用してまず谷水を飲む。登れないということは許されない。登れない子はきちんとガキ大将がアドバイスする。

そして道無き斜面をわざと登る。顔中傷だらけ。なんとか道草をくって頂上の見晴らしの良いところへつくとガキ大将に聞く「弁当どこで食べるぜよ」「腹がへったきこにするかよ」そして弁当を食べるのである。この時に水筒を持っていったかは記憶がない。弁当を食べたからお山の探検が始まる。行ったことのない所へ行くのである。どこへ行くのか誰もわからない。誰かが谷に向かうとそれについていく。まが谷、飲水を探すのである。「おおい水があるぞ」それに向かつて全員が降りていく。最年長のガキ大将に聞く「どこから水が湧きゆうがよ」、ガキ大将は、そこでみんなに谷川の水の出来方を教えるのである。全員物知りな敬礼である。「さすがじゃ」。また山登りが始まる。畑に出た。牛の糞の山がある。肥料である。だれかが「乾いちゅうぞ」と言いながら触る。「汚いじゃか、手で触るな」とそこまでは良かったのだか、触つた子どもがいじめられることを悟つたガキ大将は、全員で糞なげを提案した。糞投げの始まりである。そのあと、そのことを忘れて農家がつつたみかんをとって食べてしまう。こんなことが夕方まで続くのである。くたびれて日が暮れる。こんな事が今になれば自然教育であつた事を悟る。(〇)

〈歴史館の喫茶店〉

「カフェレスト」

な な

『菜菜』

みなさんは歴史館に喫茶店があるのをご存じですか？

駐車場から大きい階段を上がる手前に中庭（アトリウム）があり、その一角にカフェレスト菜菜があります。館内からも館外からも入れます。菜菜の名前はここ岡豊城主であった長宗我部元親の妻の名（司馬遼太郎著「夏草の賦」登場人物）にちなんでつけられています。

席数二二でガラス張りの店内には陽光がふりそそぎ、中庭の空間が見渡せる憩いの場となっています。

館の職員の間がほとんどがよく利用するほど味は好評で、コーヒーをはじめ各種飲み物、朝はモーニングセット、また、ポリコームたっぴりの牛丼、やき



そば、うどん、サンドイッチ、カレーライス、生姜焼定食などおすすめです。展示室を見てまわったあと、またちよつと休憩に菜菜をご利用ください。
営業時間は九時三〇分から夕方五時までです。



ユアボイス

1月17日に終了した『昔のくらしと道具』展のアンケートからいくつかをご紹介します。若い方と年配の方で感想が違うのが面白かったのでとり上げてみました。

- 「見たことのないものが多かった。実際に使っているところを実演という形で見てみたい」（女性、23才）
- 「民具の一つ一つが自分史と結びついて胸が熱くなりました（来てよかった！）。昔の人の苦勞・工夫・努力を現代の人にわかってほしいです」（女性、62才）
- 「子供のころや戦争中まで使っていて今はなくなった道具を見てなつかしさがこみあげました。今の“使い捨て”時代を悲しく思います」（女性、79才）
- 「また、別の地域のものをやってもらいたい」（男性、37才）
いろいろな地域の生活を民具で紹介できたら良いですね。親子で作った大津地区模型も好評でした。
- 「大津小の児童と地域の方の作られたパノラマには感激しました。子供たちに良い思い出となるでしょう。大事に保存してほしいのです。徳弘さんというすぐれた村長さんの存在がこうした形で残ったこと、人を得ることの大切さを思います」（女性、62才）
小学生からも感想文をもらいました。
- 「私たちは今、すべて、自分の仕事も、自分の力をわすれて、電気自動にたよりすぎていると思います。また民具展をやりたいと思います。」



歴史スポット⑱
ハツリ模型

昔の民家に行くことがあったら、柱をさわってみて下さい。つるつるではなく大きな波のような跡が平行にいくつもついているのに気付くと思います。ハツリという大きな斧で木材を削った跡です。製材機械が使われる以前は、人間が柱を削っていたんです。材木の上に乗って削ったので、失敗すると足を削ることもあったそうです。展示してあるのは、本物の木とハツリを樹脂で固めたものです。

（梅野）

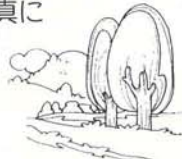
平成11年4～6月の催し物

〔企画展〕

平成11年4月23日(金)～6月27日(日)

としお
田辺寿男の民俗写真
ぼくの村は山をおりた

田辺寿男氏の民俗写真に
よって、芸西村白髪
などの離村の現実に
迫ります。



〔子ども歴史教室〕

*電話などで事前にお申し込み下さい。(先着順)

☆4月24日(土) れきみん探検

— ぶだん目にするここのない博物館の裏側を探検し、展示以外の博物館の活動を学芸員と一緒に体験します。

☆6月26日(土)

からくり人形を動かしてみよう

— からくり人形には江戸時代の科学技術の粋がこらされています。茶運び人形などを学芸員と一緒に動かしてみよう。



〔講演会〕 午後2時～4時 聴講無料
葉書にてお申し込み下さい。(定員100名。先着順)

☆5月15日(土) 山里の変動と民俗
田辺 寿男先生

(高知市文化財保護審議会委員)

〔史跡めぐり〕 所定の用紙にご希望日の優先順位を書いてお申し込み下さい。
(各回定員40名。応募多数の場合は抽選)

☆5月8日(土) (第1回) 4月17日申込締切
6月12日(土) (第2回) 5月18日 //

町並みウォッチングⅣ

高知県室戸市吉良川

溝淵博彦先生(高知県文化財保護審議会委員)
のご案内によって、四国の美しい町並みをめぐる旅の第4弾です。同じメニューで2度実施します。



写真は香川県本島

〔講座〕 午後2時～4時 聴講無料
葉書にてお申し込み下さい。(定員100名。先着順)

☆6月5日(土) 離村調査に同行して

主任学芸員 中村 淳子

〔歴民館日録〕

月日	出来事
平成11年	
1月9日	子ども歴史教室「こま遊び」
17日	企画展「昔のくらしと道具」閉幕
2月11日	企画展「寺石正路の足跡」開幕
27日	講座「寺石正路の資料から」
3月6日	講演会「考古学史の人々と寺石正路」
20日	講座「土佐の考古学史」
27日	親子史跡めぐり「民話の里めぐり」
28日	企画展「寺石正路の足跡」閉幕

臨時休館

7月5日(月)～7月12日(月) 資料燻蒸にともない休館いたします。

〔図書販売情報〕

企画展図録

「土佐・郷土史の父

寺石正路の足跡」

1000円(送料1冊 310円)

A4版 80頁(カラー8頁)

企画展図録

「昔のくらしと道具

—大津民具館の資料から—」

1000円(送料1冊 310円)

B5版 128頁

*購入ご希望の方は、当館受付で直接お求めになるか、現金書留または郵便振込でお申し込みください。着き次第、発送いたします。

郵便振込先

口座番号 01690-7-57940

加入者名 高知県立歴史民俗資料館

《ひとこと》、ふたこと》

表紙に写真を掲載し、今号はイメチェンしました。撮影者の田辺寿男先生には以前から写真術をお習いしたいと願っています。でも、「腹でシャッターを切る」という敬愛する先生のこと、テクニクが先の写真は邪道だとおっしゃるかな? 「ぼくの村は山をおりた」は、今日的な問題を孕んだ企画展です。ぜひご観覧ください。(中村)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第31号
平成十一年三月三十一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-1 高知市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888(62) 2211
FAX 0888(62) 2110
開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)
あたる場合は翌日、12月28日、
1月4日、臨休あり。
入館料 通常期(常設展)大人(18歳以上)400円
団体(20人以上)320円
高校生以下は無料
療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳
・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、
高知市及び高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・(南西村)膳写堂